

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2018.7) 平成29年度:58.

入退院センターの看護の目的に沿った実践の成果と課題

織田 裕子

入退院センターの看護の目的に沿った実践の成果と課題

○織田裕子 旭川医科大学病院 入退院センター

【目的】入退院センター（以下センターとする）の看護の目的に沿って実践の成果を評価し、今後の課題を明確にする

【研究方法】来室者数・介入件数等の集計、センター看護師が記載した「看護を実践できたと感じた事例」の内容から、看護の目的毎に実践の成果を評価する。なお、本研究に関しては研究者の所属する大学の倫理委員会からの承認を得た。データ収集の時点から個人情報情報は削除した。利益相反関係にある企業等はない。

【結果】[目的1 患者の全体像をとらえ、身体的・社会的・精神的リスク及び不安を把握する][目的2 患者が予定通り入院・検査・治療できるよう介入する]来室者は6437件、そのうち時間がなく帰宅等の理由による看護師の未介入数は35件(0.5%)であった。内服薬の確認は3605件(56%)行い、医師が未把握の抗血栓薬服用を発見した例も多数あった。内服薬が理由で手術ができなかった事例が1件あったが、薬剤介入不要の指示がある科の患者であった。休薬の介入は550件(9%)、術前点眼の介入は970件(15.1%)で、16件指示を遵守しなかった事例があったが全例予定通り入院した。[目的3 患者・家族が納得・安心して入院・検査・治療できるよう支援する]入院オリエンテーション、不安の傾聴、各部門の情報提供等を実施した。腫瘍センターの紹介は400件、化学療法DVD視聴案内を32件行った。患者から「説明を聞いて安心した」等の反応があった。「看護を実践できたと感じた事例」の記載が54件と最も多かった。[目的4 入院前から患者が安全・安楽に生活できるよう支援する]面談した6402件全事例のデータベースを作成し病棟看護師と連携した。認定看護師へ17件、病棟薬剤師へ4件情報提供した。必要時入院までの生活指導を実施した。[目的5 患者・家族が現状を受け入れ入院・検査・治療について意思決定できるよう支援する]術式で迷っている等の

事例が16件あり、医師と連携し介入した。患者が語る意思決定までのプロセスを傾聴し「前向きになれた」という反応を得た事例もあった。[目的6 退院後も患者・家族が望む生活・人生を送ることができるよう支援する]高齢・独居の患者に医療処置が必要となる場合等入院前から退院支援が必要と判断した10件について地域医療連携室看護師へ情報提供した。

【考察】高度急性期病院では、入院前から患者のリスクを把握・管理し、予定通り検査・治療を遂行すること、合併症を最小限にすることが特に求められる。そしてその実現は、患者の安心や望む生活へ繋がる。センターでは、来室者の99.5%に対し介入を行い、ほぼ全事例が予定通り入院した。抗血栓薬の内服を発見する等「入院前の最後の砦」としても機能した。リスクを把握し、予定通りに入院できるよう介入するという目的は達成した。センターでは、リスクに加え生活状況、望む生活等から全体像をとらえデータベースを全事例に作成し、病棟看護師へ情報提供した。先行研究¹⁾では、事前に作成したデータベースが危険回避に繋がること、また気がかりな点が明確となりより深い情報を患者から得てケアの質を高めることが報告されている。入院直後からの患者の安全保持や望む生活に向けての支援に繋がったと考える。しかし、各部門との連携の成果や患者からの客観的な意見は確認できていない。連携の成果や患者の安心を得られているのかの評価が課題である。

【結論】1. リスクを把握し予定通り入院できるよう介入するという目的は達成した。特に薬剤介入の成果があった。2. データベース作成が入院直後からの安全保持や望む生活への支援に繋がった。3. 患者満足度、連携の成果の調査と評価が課題である。
参考文献 1)長澤由香：入退院センターによる早期介入が病棟の看護業務に及ぼす影響,第47回日本看護学会—看護管理—学術集会抄集,153,2016